

あゆみ通信

VOL138

あゆみの会(真宗大谷
派大阪教区第2組同朋
の会推進員連絡協議会)
会長 浪花 博
広報 本持 喜康

ぼちぼち、再始動

余儀なくコロナウイルス禍による、足踏みで休ませていただいた「あゆみ通信」も、緊急事態宣言解除を受けて再始動。恐る恐るの3か月以上にわたり、仏事がなく寂しい思いをした聞法会のスタートの皮切りに第2組門徒会と共催の合同研修会を6月29日(月)に光照寺をお借りして開催を目指す。そのためには、会場となる光照寺の墨林浩住職には多大のご配慮をいただき、消毒や会場設営などを助けていただき、参加するメンバーも、マスクをし、消毒をして、十分注意しながら、決死の？覚悟で臨む聞法会である。講師は、これまで何度かお世話になった、おなじみの澤田秀丸先生である。

日程のご連絡がてら、ご案内をお送りしたら、ご丁寧なご挨拶を頂戴し、寺坊での法話のメモをいただいたので、一部を要約して紹介する。

蓮如上人「疫癘の御文」

かつて、大谷婦人会本部事務局に勤務していた時に、作家の五木寛之さんをお招きして講演会を開きました。その講演の中で、五木さんは「難



五木寛之さん

しい仏教を分かりやすくしたのが法然さん、その分かりやすくした仏教を深くしたのが親鸞さん、その深くした仏教を広くひろめたのが蓮如さん」と語られたのが印象に残っています。

(蓮如上人は、真宗の教えを広く人々に伝えるために『御文』(信心のお手紙)を書かれている)その4帖9通目に「疫癘(えきれい)の御文」があり



92)年6月」と、書かれた期日が記されています。蓮如上人79歳の時です。悪性の流行病です。伝染力が早くて広いのと、死をもたらす数が多いと解釈できます。かなり厳しい流行病で、門弟の順誓の要請で書かれました。この御文の冒頭に「この頃、悪性の流行病で多くの人たちが死んでいます。しかし、流行病で死んだものではありません(取意)」と、書き出されています。

では、なんで死んだのと、思わず尋ねたくなります。上人は、死の原因は、「生まれた時に定まっている業一人間生活の営み一なのです。だから突然のように驚いていますがそうではないのです(取意)」死は生まれた時からの約束だ、と言われるのです。しかし、これは蓮如上人の思想ではなく、さどりの智慧の仏教の説く「因縁果の法則」なのです。因は種で、縁は果を生む条件、果は因縁の果実のことです。例えば、大根の種が土は日照や水等の縁にあつて、太い大根に果実するのです。縁にはいろいろの形がありますが、縁は整えることができます。例えば病気が縁ですから、体調に留意するとか、薬の研究開発とか、医療設備の充実とか、整えることはできます。しかしどれだけ縁を整えても死の種は生にあるのですから、生まれたものは必ず死ぬという法則は逃れることはできません。私たちはともすると流行病で犠牲となられた尊い命を、(2面に続きます)

ます。その最後に、「延徳4(14

これからの仏事予定

これまでの仏事一切が、本山をはじめ、難波別院、第2組、そしてお手次の寺院で中止されて、ただ、お内仏と向き合う毎日でしたが、何とか、感染防止の設定に気を配りながら、皆様のご協力も得て、聞法会開催の運びとなりました。ご期待ください。

7月聞法会予定

日時 7月25日(土) 午後2時
会場 専行寺(天王寺区堂ヶ芝)
講題 共に学ぶ正信偈
講師 新田 修巳先生
(平野区 正業寺)
参加費 500円

モノサシが原因

推進員養成講座を修了した2008年9月に、お仲間と第2組の研修旅行に行った。行先は親鸞聖人流罪の地新潟県居多ヶ浜である。その際の講師が、大和高田市正行寺の住職(当時)當麻秀圓先生である。以来、ご縁があり寺報をいただき、ご教示を受けているが、最新号で「何が私を苦しめているのか、自分が握りしめているそのモノサシです(坂木力)」という伊東恵深住職(三重県西弘寺)の言葉が紹介されていた。

今回のコロナウイルス騒ぎで、一喜一憂する我らであるが、改めて目を覚まされられた啓示である。

「(前略)まさに、自分が握っている『モノサシ』ではかることによって、一喜一憂していたのです。仏教では、このモノサシこそが苦しみを生み出す原因であると説きます。私たちは普段、自分の考えや知識を正しいと思い込んでいます。しかしそれらを強く握りしめればしめるほど、かえって振り回されるのではないのでしょうか。この事実を日々の生活では、つつい忘れちゃいます。まいがちです。」

聞法第一。周りには善知識が、たくさんおられる。(本)

死は人生の終点 往生は浄土に生まれ往く出発

(1面から) どの国で何人、どの県で何人とただ高いところから数字を眺めるだけですが、蓮如上人はこの時



だからこそ、死をわが身の問題として因果の法則に目を開きましょう。と呼び掛けられているのです。私たちの日常生活では、死を無視して排除して生活しています。そこからさまざまな迷いを生み出しています。仏教ではこの迷いを罪業と呼んでいます。私の正しい道理の分からない迷いの日常生活を指しています。

これを「御文」では、阿弥陀如来が「さとり智慧から離れた末代の凡夫よ、迷いの中から生み出すもののみを頼りに生きる罪が迷いの中に迷いを重ねるといふ、どれほど深くても」と呼びかけられて、だからこそ阿弥陀如来は「わが阿弥陀如来を、一心に深く信じて疑うことない人々を、迷いの中にありながら落ち着いていける、安らいでいけるよろこびを与えて、必ず救いましょう」と、私に声をかけてくださった居ます。と、蓮如上人は、阿弥陀如来の直説を私たちに伝えてくださいました。

当寺(清澤寺)の揭示伝導に「死は人生の終点、往生は浄土に生まれ往く出発」と記しました。

この「御文」では、さとり浄土のことを「極楽」と書かれています。が、「極」は「木」と「亟」(端から端まで張り伸ばす)と書きます。木造住宅で木が端から端まで途中で継ぎ足さないでつらぬくのは棟木ですが、棟木は家の高いところにあるので極上の意に使われています。私たちが今握っている喜びや幸せは死で終わります。それに対して最高の楽しみは、この世からあの世

へと、死を尊いご縁として貫いていく喜びこそ、さとりという言葉に聞いていただく信心の喜びであることを「極楽」は教えています。貫いていくのですから、死の受け止め方も変わってきます。「すくわれる」ということは、苦悩の中にありながら、落ち着いていける、安らいでいけるよろこびを得た心境を言いあらわしています。

この開かれたさとり浄土から「今」私の「心」に届く



「仏」が、念仏であります。念仏の教えが届いてくださると、死して帰る浄土が、生きる依りどころとなります。そして、生きる依りどころが死して帰る世界であるという、生死を貫いた極なる楽の帰依のよろこびを念仏が届けてくださいました。

また、浄土真宗の根本経典であります『仏説無量寿経』に

「寿終身死(じゅじゅしんし)、当独遠去(とうどくえんこ)」と説かれています。これは蓄えた価値ある寿が終わり、身が死んで当に独り遠く去る。と、私たちの臨終の姿を説いていますが、誰もついてきてくれる者もなく「独り遠く去る」私に、「真実信心を得た人にそいたまいて、護りたもう」(親鸞聖人著「唯信鈔文意」と往生浄土へと寄り添いきってくださいるのが念仏なる阿弥陀如来であります。

蓮如上人は、この「御文」で、阿弥陀如来の念仏のはたらきの「ありがたさ、うれしさの、御礼の心のあらわれとしてお念仏をもうしましょう」と勧められ、このお念仏を仏恩報謝の念仏と申し上げるのです」と結ばれました。終わり。

人間の不安・おそれ 中川皓三郎先生

『華嚴経』と言う經典のなかに、「五怖畏」と言う言葉が出てきます。人間の不安、おそれについて整理されたもので、

「不活畏」(ふかつい)「悪名畏」(あくみょうい)「死畏」(しい)「悪道畏」(あくどうい)「大衆威徳畏」(だいしゅういとく)の五つにまとめられています。まず、「不活畏」というのは、生活不安のことで、生活ができるかもしれないといおそれです。次に「悪名畏」というのは、人から悪人と見られて、社会的な立場、自分の居場所がなくなるかもしれないというおそれ。「死畏」というのは、その言葉のとおり、死へのおそれです。そして「悪道畏」とは、地獄・餓鬼・畜生と言う言葉で表される「三悪道」と言う世界に堕ちたくないというおそれです。別の言い方では、今はそこそこやれているが、何かが起こって生活が苦しくなるかもしれない、不幸せになるかもしれないというおそれが「悪道畏」ということではないかと思ひます。また、「大衆威徳畏」というのは、自分の考えをみんなの前で言うと思捨てられるのではないかというおそれです。戦時中、「非国民」と言う言葉があったように、「これは間違っている」と発言することによって、自分の居場所が奪われてしまうかもしれないというおそれ。それが「大衆威徳畏」です。(続く)

(「ほんとうに生きるということ」東本願寺出版)

中川皓三郎先生：前帯広大谷短期大学学長